

科学研究費助成事業（基盤研究（S））公表用資料
〔令和5（2023）年度 中間評価用〕

令和5年3月31日現在

研究期間	：2021～2025
課題番号	：21H04984
研究課題名	：シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷－農耕都市空間と遊牧民世界の共存－
研究代表者氏名（ローマ字）	：山内 和也（YAMAUCHI Kazuya）
所属研究機関・部局・職	：帝京大学・付置研究所・教授
研究者番号	：70370997

研究の概要：

本研究はこれまでの発掘調査成果に基づき、アク・ベシム遺跡をより体系的かつ組織的に発掘し、遺跡の成立から衰退（10世紀頃）までの歴史や人の生活の詳細な復元をめざすものである。考古学、美術史学、建築史学、生物考古学、文化財科学、考古医科学、考古生体有機化学、地理学、民俗学、文献史学、宗教学の諸分野の研究者が集い、当遺跡と周辺草原地域の歴史や人の営みの全貌を明らかにする。

研究分野：考古学

キーワード：シルクロード / スイヤブ / 都市遺跡アク・ベシム / チュー川 / ソグド / 唐代碎葉鎮城 / 交易都市 / キルギス / 唐 / イスラーム / 東西文化の接点 / 灌漑システム / アク・ベシム / 農耕都市 / 遊牧民

1. 研究開始当初の背景

アク・ベシム遺跡は、シルクロードの交易民であるイラン系のソグド人が建設した街スイヤブ（第1シャフリスタン）と、中央アジアに進出した中国の唐が作った軍事拠点「碎葉鎮城」（第2シャフリスタン）とが併存する他に類を見ない都市遺跡である。研究代表者の山内は、科研採択以前から中央アジアの研究者たちとの強固な信頼関係に基づいて、この都市遺跡の発掘調査を進めてきた。その結果、この遺跡で東方文化と西方文化が接触する様相を見て取ることができたが、同時に考古学的な発掘調査だけで研究を進めることに限界を感じるようになった。

2. 研究の目的

本研究では、農耕都市空間としてのアク・ベシム遺跡を発掘調査するだけでなく、遊牧民世界に焦点を合わせた調査研究を実施し、農耕都市空間との共存関係を解明する。そして、点としてのアク・ベシム遺跡（農耕都市空間）と面としてのチュー川流域地域（遊牧民世界）を1つの空間として総合的に解明し、シルクロード沿いに位置する類似空間における農耕都市空間と遊牧民世界の共存関係を学術的に理解するためのモデルを構築する。また、医科学系の研究者の参画を得て、これまで見過ごされてきた流行性疾病の伝播状況や病因・死因を分析し、さらには過去のゴミやトイレ遺構に含まれる微生物や細菌の分析から当時の人間の健康状態を解明する新しい研究分野（考古医科学）の創成を試みる。

3. 研究の方法

本研究の組織は、総括班、考古学班、美術史・建築史班、生物考古学班、文化財化学班、考古医科学班、考古生体有機化学班、地理学・民俗学班、文献史学・宗教学班の9班で構成される。各研究班は自己完結したモジュールであり、各班が独自に研究を行うが、同時に各班が連携して、遺跡を含む文化空間における住民の衣食住や文化・歴史を総合的に復元することをめざす。

4. これまでの成果

これまでに挙げてきた成果は以下の通りである。
○2021年度

- ・オンライン会議：各班ごとにオンラインで会議を行い、それぞれの研究計画を共有した。
- ・シルクロード学研究会：2022年1月22・23日に、関連分野の専門家を招いてオンラインで開催した。

○2022年度

- ・4月22日から5月27日の日程で、アク・ベシム遺跡における発掘調査を実施した。唐が作った中心施設と思われる AKB-15 区、東方キリスト教会跡である AKB-8 区、仏教寺院跡である AKB-18 区（龍谷大学と共同）をそれぞれ発掘した。
- ・8月5日から9月7日の日程で夏期調査を行い、①発掘した遺物の整理作業、②天山山脈のベデル峠ルート（天山シルクロード）の踏査、③遊牧民の居住跡・墳墓調査、④現地シャーマンへの聞き取り調査、の各調査をそれぞれの担当者が行った。特に②は、当初の研究計画にはない新たな展開である。
- ・オンライン勉強会：考古学班が主導して各自の調査内容・研究成果を報告し、議論を深めた。
- ・シルクロード学研究会：7月30・31日、2023年1月21・22日に、関連分野の専門家を招いた研究会を開催した。前者は同年春期の発掘調査について概要報告を行い、オンラインで開催した。後者は関連分野の専門家を招き、帝京大学文化財研究所と Zoom ウェビナーを併用したハイブリッドで開催した。
- ・春期・夏期の調査風景を撮影した動画を公開し、日・英・中・露・キルギス語で字幕を付けた（日本語版 URL は下記）。

5. 今後の計画

今後は、以下の諸点を中心に本研究を進めていく。

○研究活動

- ・発掘調査：従来のアク・ベシム遺跡における発掘調査と並行して、周辺の山あい広がる遊牧民の居住地跡や墳墓の発掘調査を行う。
- ・医科学的調査：アク・ベシム遺跡の土壌サンプルを分析し、病原体などの痕跡を調査する。
- ・各研究班の成果を統合し、本研究の重点的な目標の1つである「スイヤブ・モデル（農耕都市定住民と遊牧民との共存関係モデル）」の構築を目指し、最終的な成果の1つとする。

○研究成果の社会還元

- ・シルクロード学研究会の開催：引き続き夏期と冬期の年2回ペースで研究会を開催する。夏期はアク・ベシム遺跡の発掘調査報告を、冬期は関連分野の専門家を招いた研究集会とする。
- ・国際シンポジウムの開催：キルギス共和国の研究者をはじめとする関連分野の研究者を招いて開催する。ハイブリッド開催で海外にも配信する。
- ・研究概説書の刊行：2024年度中に研究成果の一般向け概説書を刊行する。
- ・調査風景動画：2023年度以降も調査動画を配信し、字幕を日・英・露・中・キルギス語に翻訳する。

6. これまでの発表論文等（受賞等も含む）

「アク・ベシム遺跡第2 シャフリスタン地区出土土器の年代学的検討」、山藤正敏、『帝京大学文化財研究所研究報告』、査読有り、21集、pp.1-23、2023

「隋唐隨身符制新探——玄宗即位以前を中心に——」、柿沼陽平、『古代文化』、査読有り、74巻3号、pp.38-57、2022

「草原地帯の牧畜—キルギス共和国アク・ベシム遺跡における動物の利用—」、植月学、丸山真史・菊地大樹（編）『家畜の考古学 古代アジアの東西交流』雄山閣、査読無し、pp.93-106、2022

- "Animal species identification utilising DNAs extracted from traditionally manufactured gelatin (Wanikawa)", Haruki Kuramata, Miho Hashiba, Yuriko Kai, Kazuhisa Nishizawa, Tsuyoshi Inoue, Takane Kikuchi-Ueda, Manabu Uetsuki, Kazuya Yamauchi, Akira Fujisawa and Hiroyuki Oshikane, *Heritage Science*, 査読有り, No.10, Article No: 183, 2022

7. ホームページ等

- ・帝京大学文化財研究所ホームページ <https://www.teikyo-u.ac.jp/bunkazai/>
- ・アク・ベシム遺跡発掘調査風景動画 <https://www.youtube.com/watch?v=DuCk6Jv4fBE>
- ・帝京大学ホームページ <https://www.teikyo-u.ac.jp/affiliate/research/sr>